THE TEAM FESTIVAL 2024 WINTER

2月24・25日
ドリームスタジアム太田

ボウリングの新たな楽しみ方・見せ方を提示

エキシビションマッチのJBC vs NBFは大盛り上がり

JBCが昨年3月（11・12日／神戸六甲ボウル）に初めて開催したTHE TEAM FESTIVALは、これまでのボウリングの固定観念にとらわれない楽しみ方に大胆に切り込んで、大きな反響を呼んだ。その第2弾が2月24、25の両日、群馬・太田市のドリームスタジアム太田に舞台を移して行われ、よりショーアップされたイベントとして大いに盛り上がった。（主催：(公財)全日本ボウリング協会、特別協賛：ファイテン㈱）

▲今大会はドリームスタジアム太田が熱戦の舞台となった（©JBC）

勝負より楽しさを前面に

ＪＢＣが昨年11月にエントリーの募集を始めると、ダブルス戦51チーム、チーム戦（4人）19チームの定員はたちまち埋まり、2回目にして早くもボウラーに認知されたイベントであることがうかがい知れた。まただれでも参加できるとうたっているが、実際に参加者の3分の1は、ＪＢＣ会員以外のボウラーだった。

●ダブルス戦

初日に行われたダブルス戦は、レギュラー方式6G（チーム12G）、スカッチダブルス方式3Gの合計15Gの上位18チームが2ndラウンドに進出。18チームを3グループに振り分け、ゼロスタートでスカッチダブルス5Gを行い、各グループ最上位チームがファイナルに進出。ファイナルは主催者推薦の1チーム（表彰対象外）を加えた4チームが『9-10BATTLE』で優勝を争ったが、先の大学個人選手権を制した吉原正明選手と同じ青森中央学院大で、ナショナルチームにも在籍する須藤真海選手が組んだ“豪雪すぎて草”が優勝を飾った。

●チーム戦（4人）

チーム戦も、レギュラー方式3G（チーム12G）とベーカー方式6Gの18Gトータル上位12チームが2ndラウンドに進出。12チームを3グループに振り分け、ゼロスタートのベーカー方式ラウンドロビン5Gを行い、各グループの最上位チームがファイナルに進出。ファイナルは主催者推薦の1チーム（表彰対象外）を加えた4チームが、くじ引きで、例えば1～3本を倒せなどの4つのミッション（1名1回）に挑戦、そのクリアポイントの合計で争う『MISSION　CHALLENGE』が行われたが、JBC栃木県連の新井審護選手と ABBFの川上健太、川上貴司、石川和孝の3選手が組んだ“たのしんご”が優勝を飾った。

優勝インタビューに「普通に対戦したら絶対に勝てないような相手にも、勝つチャンスがあるのがよかった」と新井選手が答えたように、参加ボウラーにもおおむね好評だった。

▲ダブルス戦入賞チーム、左から2位・#マジA&G、優勝・豪雪すぎて草、3位・八王子が№1

▲派手なパフォーマンスで場内を沸かせた渡辺元造選手は、三上彩奈プロ（54期）とのペアで2位入賞

◀同じ大学の吉原正明選手とのペアで優勝の須藤真海選手

◀▲チーム戦優勝の“たのしんご”（©JBC）

新時代へ歴史的な一戦

今大会のハイライトは、なんといっても初日の最後に組まれていた『JBC VS NBF FINAL BATTLE』と銘打たれた エキシビションマッチだった。かつてはいささかの不協和音が聞こえた時代もあったが、両団体の象徴ともいえる赤木恭平元 JBC会長と、白石雅俊NBF理事長もビデオメッセージで盛り上げに一役買った。

ＪＢＣはいずれもユースナショナルチームの近藤眞桜、渡辺希哩、廣岡光希、齋藤大哉の若いメンバーに対し、NBFは数々のタイトルを保持する木村祐子、保木絵里、高橋浩一、宮澤國彦のベテラン勢で固めた。競技は、カレントスコアリングシステムで、先に500点に到達したチームが勝ちという『カレントカウントアップ500』で行われた。

ゲームは抜きつ抜かれつの大激戦、フレームごとに得点が決定する、カレントスコアリングシステムのわかりやすさも手伝って、場内は大盛り上がりだった。チーム JBCが23フレーム目に先に500点に到達したが、同じ23フレーム、チーム NBFも渾身のストライクで追いつき、勝負はワンショットプレーオフへ。宮澤選手が見事にストライクを持ってきたチーム NBFに軍配が上がった。

▲JBC赤木元会長（左）とNBF白石理事長が激励のビデオメッセージを寄せた

▲ストライクに笑顔がはじけるチームJBC

▲ "JBC vs NBF FINAL BATTLE" に出場のチームNBF（左）とチームJBCのメンバー（©JBC）

▲気合の雄叫びはチームNBFの木村選手

▲戦い終わって健闘を称え合った